

大学生における境界例心性とEgo-Resiliencyおよび 自己評価された防衛機制との関連性

江上, 奈美子
九州大学大学院人間環境学研究院 | 東京大学学生相談所

<https://doi.org/10.15017/1516130>

出版情報：九州大学心理学研究. 15, pp.9-17, 2014-03-01. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

大学生における境界例心性と Ego-Resiliency および 自己評価された防衛機制との関連性

江上奈美子 九州大学大学院人間環境学研究院／東京大学学生相談所

Borderline personality traits and ego-resiliency and self-evaluated defense styles in university students

Namiko Egami (*Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University / Student Counseling Center, Tokyo University*)

This study examined the relation between borderline personality traits and ego-resiliency and self-evaluated defense styles in a sample of 278 university students. Participants completed a questionnaire assessing borderline personality traits, ego-resiliency, defense styles. On the basis of their scores for borderline personality traits, they were divided into three groups: high, middle, and low. The results showed that the high group scored significantly higher on the CAQ-Ego-Resiliency Scale than the middle or low group did. Further, the high group had significantly lower scores on the “control of self” factor of the Defense Style Questionnaire-42 but significantly higher scores on “failure to control self” factor of this scale than the other two groups. Borderline personality traits were significantly correlated with devaluation, which is a feature of ‘image distorting’, marker for borderline personality disorder. Further research is needed to confirm the validity of factors of the Defense Styles Questionnaire-42 and to explore how the present results regarding ego-resiliency and defense styles can be utilized in psychotherapy for university students with a high level of borderline personality traits.

Key Words: borderline personality traits, ego-resiliency, defense styles, university students

問題と目的

大学生の境界例心性について

現代の一般大学生において、衝動性や空虚感、見捨てられ抑うつなどの情緒のコントロールが苦手で、自己像が不安定であり、特に対人関係上でネガティブな体験を多くもつ一群が存在する。このパーソナリティ特性については、1990年代から安立（1999）らによって境界例心性として着目されてきた。境界例心性については、古川・北山（2004）が「社会的・文化的に逸脱しない範囲であるものの、対人関係・自己像・感情の不安定および空虚感・著しい衝動性などの人格的特徴」と定義している。

江上（2011）によると、この境界例心性が強い大学生は、境界例心性が弱い大学生に比して対人関係上のネガティブな体験が多く、それに対し不快感情を抱いているという。大学生の心理的援助を行う学生相談の場でも、境界例心性と思われる事例が布柴（2012）や西村（2002）によって報告されていることから、境界例心性が強い大学生には心理的援助が必要となる場合も多いだろう。彼らの心性理解や有効な心理的援助についての議論が求められているといえるが、国内で得られている知見はまだまだ数少なく、その点が課題として挙げられる。

境界例心性と自我の機能

自我の意味のひとつに「個々の心的現象や意識体験を統一的に説明するために仮定される構成概念」がある

（小此木，2002）。心理療法を行う場合、特に精神分析的
心理療法では、この自我がどの程度成熟しているか、どの
程度機能しているかなどのアセスメントが重要視されて
いる（皆川，1981）。

臨床群である境界性パーソナリティ障害ではこの自我
の弱さが指摘される場合が多い（Kernberg，1980/2002）。
それでは非臨床群である境界例心性が強い大学生の自我
はどのような状態であろうか。一般大学生の中で境界性
パーソナリティ傾向が強い場合は、抑うつや不安などで
情緒的な困難を抱えていることが Fonseca-Pedrero et al. (2011) によって示されている。また Trull (1995) は、
境界性パーソナリティ傾向の強い大学生は親密性が確立
できないなど対人関係上にも様々な問題を抱えているこ
とを示している。これらの知見から境界例心性が強い大
学生は大学生活の中で不適応になる場合も多いと考えら
れる。前田（1985）は、自我が強い（成熟している）場
合は良い適応ができるが、自我が弱い場合は不適応の道
に進むと指摘しており、また長尾（2002）も非臨床群に
おいても自我の弱さと不適応が深く関わっていると指摘
している。これらの知見を総合的にまとめると境界例心
性が強い大学生も自我が弱い傾向にあるのではないかと
推測される。

その自我の強さや成熟度はどのような視点から推測さ
れるかについては、前田（1985）が自我の強さを測る観
点として、現実吟味やフラストレーション耐度、自我
の柔軟性、防衛機制などいくつか挙げている。本研究で

は、境界例心性と自我機能との関連を検討することを目的として、前田（1985）の指摘する自我の強さの指標から「適切な自我防衛」と「柔軟性」に焦点をあてて、境界例心性との関連を検討する。乾（2009）もまた、青年を対象とした精神分析的アプローチにおいて、パーソナリティが柔軟に働いているか、どんな防衛が使われているかなどを評価することがアセスメントに重要だと記述しているため、自我の防衛機制や柔軟性は大学生の適応や心理アセスメント、その後の心理療法の経過にも重要な視点だといえる。本研究では自我の柔軟性を測定する指標として Ego-Resiliency を、適切な自我防衛を測定する指標として防衛機制に着目することとする。

自我の柔軟性 (Ego-Resiliency) について

前田（1985）は自我の強さを測る観点として、「柔軟性」を挙げている。前田の挙げた自我の柔軟性を反映する概念として Ego-Resiliency が着目される。Ego-Resiliency は、変動する状況にどのくらい柔軟に対応できるかという個人の能力のことをさす (Block & Block, 2006)。Ego-Resiliency については様々な研究が行われているが、Ego-Resiliency と幼少期の愛着が関連していること (Arend et al., 1979)、親の押しつけがましい養育態度が乳幼児の Ego-Resiliency に負の影響を及ぼすということ (Taylor et al., 2013)、アルコール依存の精神疾患をもつ父親のそばにいる少年はそうでない少年よりも Ego-Resiliency が低いこと (Eisenberg et al., 2010) などの知見から、Ego-Resiliency には乳幼児期の親子関係が重要な影響を及ぼすことがうかがえる。また、高い Ego-Resiliency の能力を備えている場合は、各発達段階のそれぞれの課題にも適切に取り組むことができると指摘されている (Asendorpf et al., 1991)。縦断的な検討では、Chuang et al. (2006) が、2才から3才の間に Ego-Resiliency が高まると指摘しており、また Vecchione et al. (2010) がその後 16 歳から 20 歳の間に安定すると述べている。したがって、人生の早期から Ego-Resiliency を身につけられない場合は、その後の人生において不適応に陥りやすく発達課題に取り組んでいくことが困難になると推測される。

このように Ego-Resiliency は現在の適応を測定したり将来の適応を予測したりすることが可能な重要な概念といえるが、国内では Ego-Resiliency に関する研究はあまり見られない。この Ego-Resiliency を測定する尺度として中尾・加藤 (2005) が CAQ 版 ER 尺度を作成している。この尺度は他者の中での自己を調整うまく合わせていくことが可能な「対他的 ER」と、自分自身の気もちの調整をしていくことが可能な「対自的 ER」の2因子構造から成り立っている。さらに中尾・加藤 (2005) において「ERが高いほどストレス状況下でも自己に対して

ポジティブな見方を保持できる」との観点から見捨てられ不安との関連を検討した結果、「対自的 ER」と見捨てられ不安には中程度の有意な負の関連があることを見出している。この見捨てられ不安は境界例心性に見られる心理的特徴であり、このことから境界例心性と対自的 ERの間には負の関連が推測される。「対他的 ER」については見捨てられ不安と関連が見られているが非常に弱いものであった (中尾・加藤, 2005)。この結果をふまえて本研究では対自的 ER と境界例心性にどのような関連があるかを検討していく。

防衛機制と境界例心性

防衛機制とは自我の防衛のための活動である (馬場, 2002)。前田 (1985) は、この防衛機制がうまく用いられると適応に役立つが、下手に用いられると不適応のもとになると指摘しており、防衛機制の用いられ方によって適応が左右されることを示している。

防衛機制は無意識的に行われる自我の機能であるが、欧米ではこの防衛機制を測定する尺度が開発され、使用されている。無意識的に行われる機能が質問紙調査で測定されることの矛盾が感じられるが、Bond et al. (1983) は、人々は防衛がうまくいかないときに起こる衝動を通じてその防衛の存在を知ることができるとし、さらには周囲からの指摘から気づくことになったり、自分に特徴的な防衛機制をとれないときに不安や抑うつが生じたことを記憶している可能性などを指摘し、意識下で自分の防衛機制の特徴を知り得ていると主張している。防衛機制を自己評価によって測定する尺度の一つに DSQ (Defense Style Questionnaire) があり、この DSQ と境界性パーソナリティ傾向や境界性パーソナリティ障害との関連を指摘する先行研究は散見される (e.g., Johnson et al., 1992; Sinha et al., 1999)。防衛機制の分類については、DSQ の従来の分類である「未熟な防衛機制」、「神経症的な防衛機制」、「成熟した防衛機制」の三分類が存在するが、研究者によってはこの三分類に異議を唱え、異なった分類を行っている場合もある。その多くが「適応」、「不適応」、「イメージの歪み」、「自己犠牲」の四分類である (e.g., Johnson et al., 1992)。適応的な防衛機制と成熟した防衛機制が共通であり、不適応的な防衛機制と未熟な防衛機制が共通であるといえる。

境界例心性を強くもつ大学生がどのような防衛機制を用いるかについては、一般大学生を対象とした調査で、一般大学生のパーソナリティと防衛機制との関連が検討された (Johnson et al., 1992)。その結果、投影や退行、行動化などの不適応的な防衛機制と境界性パーソナリティ傾向との間には関連が見いだされた。しかし、その他の防衛機制である全能感や価値下げなどを含む「イメージの歪み」や、反動形成などを含む「自己犠牲」、

昇華やユーモアを含む適応的な防衛機制との間には関連が見出されなかった。一方、Sinha et al. (1999) は、未熟な防衛機制と境界性パーソナリティ傾向には正の関連があり、成熟した防衛機制と境界性パーソナリティ傾向には負の関連が見られたと報告している。以上の先行研究の結果から、不適応または未熟な防衛機制は境界性パーソナリティ傾向と正の関連があることが推測される。適応または成熟した防衛機制については一致した見解が得られていない。国内では、見捨てられ不安の高い人は未熟な防衛スタイルに加えて神経症的な防衛スタイルも高い一方、成熟した防衛スタイルが低いという結果が示されている(蓮花, 2008)。見捨てられ不安は境界例心性の特徴のひとつであるといえるため、境界例心性と成熟した防衛機制に負の関連があるのではないかと考えられる。

ところで、たびたび議論されるのが境界性パーソナリティ障害と「イメージの歪み」との関連である。「イメージの歪み」には、全能感、価値下げ、原始的な理想化、分裂から構成される (Johnson et al., 1992)。境界例患者にはこの「イメージの歪み」がみられるという知見がいくつ報告されている (Koenigberg et al., 2001, Bond et al., 1994)。Bond (2004) では、パーソナリティ障害患者群から境界性パーソナリティ群を区別するのにも有用であると指摘している。しかし、Johnson et al. (1992) によると、一般大学生の境界性パーソナリティ傾向と「イメージの歪み」には関連がみられておらず、むしろ自己愛や反社会的なパーソナリティ傾向と関連が見られるとされている。以上の先行研究から、臨床群である境界性パーソナリティ障害では「イメージの歪み」との関連が強いと思われるが、非臨床群ではそうでない可能性が考えられる。しかし、境界例心性の観点から考察すると、境界例心性高群はハイリスクな群といえるため「イメージの歪み」の特徴が得られる可能性が考えられる。以上の議論から、境界性パーソナリティ傾向と防衛機制について二つの疑問点を挙げる。一点目は未熟な(不適応的な)防衛機制についてはおそらく関連があると推測されるが、成熟した(適応的な)防衛機制については関連があるか明確な結果が得られていない。また、二点目として「イメージの歪み」については臨床群で関連が見られているが、健常群では見られていない。国内では検討されておらず、詳細が明らかでない点が多い。したがって本研究では、この二点について検討していく。防衛機制を検討することの意義として、Johnson et al. (1992) は、どのような防衛機制を用いるかで顕在化していない精神病のリスクを見分けることに寄与するということを主張しており、用いられる防衛機制の傾向をつかんでおくことは重要だと考えられる。また、境界性パーソナリティ障害の患者については、心理療法の開始時点で特徴

的な防衛機制をアセスメントしておくことは重要であるという指摘もある (Devens & Erickson, 1998)。境界例心性が強いクライアントに対しても同様に特徴的な防衛機制をセラピスト側が認知しておくことは重要だと思われるため、個々の事例に目を向ける姿勢は必要であるが、全体的な傾向を捉えておくこともまた有用だといえるだろう。

なお、防衛機制の性差について検討している研究は少ないが、Watson (2002) によると、防衛機制の用い方には性差が見られるという。例えば、「敵意」への防衛機制は女性が「置き換え」を用いるが、男性は「行動化」を用いるという結果が得られている。このように防衛機制の用い方には性差があると考えられ、それは境界例心性についても同様のことがいえる可能性があるため男女別に検討する必要があるだろう。

本研究の目的 大学生の境界例心性と自我の柔軟性との関連について検討する。このとき、自我の柔軟性を測定する指標として、Ego-Resiliency、防衛機制を取り上げ検討することとする。

仮説

1. 境界例心性が高い大学生は対自的ERが低い。
2. 境界例心性が高い大学生は低い大学生よりも、不適応的な(未熟な)防衛機制を用いる。
3. 境界例心性が低い大学生は高い大学生よりも、適応的な(成熟した)防衛機制を用いる。
4. 境界例心性が高い大学生は、「イメージの歪み」が見られるものの、低群は見られない。

方 法

調査対象 国立大学生311名から回答を得た。そのうち、回答に不備があった39名を除く272名を分析対象とした(男子121名、女子151名)。平均年齢は19.85歳であった($SD=98$)。有効回答率は87.5%であった。

調査実施 調査は2012年10月中旬に実施された。

質問紙の構成 ①境界例心性尺度(江上, 2011): 全36項目からなる。「非常にあてはまる」から、「全くあてはまらない」の6件法で回答をもとめた。6因子構造が確認されており、その6因子とは「空虚感(項目例: この先何をしたいのか私には分からない)」「感情の不安定性(項目例: なげやりな気持ちになる)」「衝動性(項目例: かんしゃくを起こしたい気分になる)」「自己像の不安定さ(項目例: いったい私は誰なのかと困ってしまう)」「対人関係の不全(項目例: 私には信頼できる人がいる(逆転項目))」「見捨てられ抑うつ感(項目例: 私は孤独だと思う)」である。本研究では境界例心性全体に着目しているため、因子ごとの分析は行わないこととする。

② CAQ 版 ER 尺度 (CAQ-ER) (中尾・加藤, 2005): 全 16 項目からなる。「非常によくあてはまる」から「全く当てはまらない」の 7 件法で回答をもとめた。中尾・加藤 (2005) によって「対他 ER」(9 項目) と「対自 ER」(7 項目) の 2 因子構造が確認されており, 信頼性と妥当性についても確かめられている。項目例として「対他 ER」は「私は, 人から自分に対する好意や受容を引き出すことができる」「私は, ころろがあたたく, 親密な関係を持つことができる」などがあり, 「対自 ER」では「私は基本的に不安が強い」「私は, いろんなことをあれこれ考えてしまい, それらが頭から離れないことが多い」などがある。③ 防衛機制測定尺度 (Defense Style Questionnaire: DSQ₄₂) (中西, 1998) 海外で作成された DSQ40 に中西 (1998) が虚偽検知項目 2 項目を加えた日本語版 DSQ₄₂ を使用した。全 42 項目からなる。「私に全く当てはまる」から「私に全然当てはまらない」の 9 件法で回答をもとめた。項目例として, 「人に利用されることが多い (投影)」「自分の失敗を笑いに換えることが容易にできる (ユーモア)」「私は何も恐れない (否認)」などがある。この DSQ₄₂ は, 未熟な防衛機制, 神経症的な防衛機制, 成熟した防衛機制的三分類とされているが, Johnson et al. (1992) は「適応」, 「不適応」, 「イメージの歪み」, 「自己犠牲」の四分類を行っている。したがって本研究では再度因子分析を行い, 境界性パーソナリティ障害と関連が指摘されている「イメージの歪み」を反映する因子を抽出できるかについて試みることにする。なお, 吉住・村瀬 (2008) では因子分析の結果 3 因子構造が確認されているが, 「イメージの歪み」を反映した因子は見受けられなかった。

実施方法 心理学の講義を受講している大学生に講義終了時に質問紙を一齐に配布し, その場で回答を求め回答終了後に回収した。

結 果

各尺度について

Cronbach の α 係数を算出したところ, 尺度全体および各因子において $\alpha=.77$ 以上の十分な信頼性が確認された。Table 1 に, 各尺度の信頼性, 平均値, 標準偏差を記述した。

Table 1
各尺度の信頼性, 平均値および SD

| | 信頼性 | 平均値 | SD |
|----------------|-----|--------|-------|
| 境界例心性 | .93 | 128.44 | 30.28 |
| Ego-Resiliency | .88 | 63.80 | 13.97 |
| 対他 ER | .87 | 36.57 | 8.48 |
| 対自 ER | .85 | 27.23 | 8.07 |
| 防衛機制 | .77 | 188.86 | 25.96 |

境界例心性のグループ分け

境界例心性尺度の合計得点において, 上位 33.3% を境界例心性高群, 下位 33.3% を境界例心性低群, その他の対象者を境界例心性中群とした。このとき境界例心性高群は 94 名, 境界例心性中群は 84 名, 境界例心性低群は 94 名であった。各群の平均値および標準偏差は Table 2 に示した。1 要因分散分析および Tukey の HSD 法による多重比較の結果, 境界例心性の 3 群の間にはいずれにも有意な差が得られている ($F(2,269)=447.85, p<.001$)。

Ego-Resiliency と境界例心性

CAQ 版 ER 尺度 16 項目に対して因子分析を行った結果, 中尾・加藤 (2005) と同様の 2 因子構造が確認された。境界例心性を抱く強さによって Ego-Resiliency が異なるかについて, 境界例心性の高中低を独立変数, 中尾・加藤 (2005) による 2 つ因子の「対他 ER」と「対自 ER」の合計得点を従属変数として 1 要因分散分析 (3 水準) を行った。分散分析の結果, 境界例心性の高中低によって「対他 ER」および「対自 ER」は有意な差がみられた (対他 ER: $F(2,269)=43.64, p<.001$, 対自 ER: $F(2,269)=99.17, p<.001$)。Tukey の HSD 法による多重比較を行ったところ, 「対他 ER」および「対自 ER」においてすべての群間に有意な差が得られた。以上の結果から, 境界例心性が高い群は「対他 ER」および「対自 ER」がもっとも低く, 境界例心性が低い群はそれらがもっとも高いことが示された。結果を Table 3 に示した。ゆえに, 「対自 ER」についての仮説 1 「境界例心性が高い大学生は対自 ER が低い」は支持された。また「対他 ER」と境界例心性については新たな関連が見出された。

Table 2
境界例心性の 3 群の平均値と分散分析結果

| 境界例心性 | | | F 値 |
|---------------------|---------------|---------------|------------------------|
| 高群 (n=94) | 中群 (n=84) | 低群 (n=94) | |
| 159.28 (15.42) | 130.65 (6.68) | 95.62 (18.43) | $F=447.85^{***}$ 高>中>低 |
| 注 1) () は SD | | | |
| 注 2) $^{***}p<.001$ | | | |

Table 3
境界例心性と Ego-Resiliency の平均値と分散分析結果

| | 境界例心性 | | | F 値 |
|---------------------|--------------|--------------|--------------|---------------------|
| | 高群 | 中群 | 低群 | |
| 対他 ER | 31.64 (7.80) | 36.33 (6.25) | 41.71 (7.91) | 43.64^{***} 高<中<低 |
| 対自 ER | 21.28 (5.93) | 26.49 (5.43) | 33.84 (6.91) | 99.17^{***} 高<中<低 |
| 注 1) () は SD | | | | |
| 注 2) $^{***}p<.001$ | | | | |

DSQ₄₂と境界例心性

DSQ₄₂の42項目のうち、虚偽検知項目を除いた40項目の平均値と標準偏差を算出し、フロア効果および天井効果が見られた2項目を以降の分析から除外した。

次に残りの38項目に対して因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った結果、スクリープロットおよび解釈可能性から3因子構造が妥当だと考えられた。そこで再度因子分析を行い、.35より小さい因子負荷量を示した項目を除外し、さらに因子分析を行った。結果はTable 4に示した。第1因子は「苦しい状況でもそのおもしろい側面を見つめることができる」などのユーモアや「自分の活動の妨げになるような感情を私は抑え続けることができる」など自分の感情をコントロールできる成熟した情緒の特徴を示す項目からなるといえ、吉住・村瀬（2008）の命名にならない「自己統制」とした。第2因子は、「好きでないことをしなければならない時には頭が痛くなるなどストレスが体の不調につながる身体化の項目や、「傷つけられるとあからさまに攻撃的になる」など行動化に結びつく項目から成り立っており未熟な自我を反映しているといえ、「統制失敗」と命名した。第3因子は、「私は何も恐れない」、「問題なく人生をやり過ごせるような特別な才能を持っている」などの万能感を反映させる項目からなっているため「万能感」と命名した。

境界例心性の高中低、および性別を独立変数、防衛機制の各因子の合計得点の平均値を従属変数として3×2水準の2要因の分散分析を行った。結果はTable 5に示した。分散分析の結果、「自己統制」「統制失敗」「万能感」のすべてにおいて交互作用は見られなかった（「自己統制」： $F(1,266)=1.20, n.s.$ 、「統制失敗」： $F(1,266)=.36, n.s.$ 、「万能感」： $F(1,266)=.42, n.s.$ ）。次にTukeyのHSD法を行った結果、「自己統制」「統制失敗」「万能感」すべてに境界例心性に主効果が見られ、さらに「万能感」においては性別にも主効果が見られた。「自己統制」については境界例心性低群と中群はそれぞれ高群よりも有意に得点が高く、「統制失敗」については境界例心性高群が有意に中群と低群よりも得点が高く、境界例心性中群も低群よりも得点が高かった。また「万能感」については、境界例心性低群が高群よりも有意に得点が高かった。性差については男子学生の方が女子学生よりも有意に得点が高い傾向が見られた。以上の結果から、仮説2の「境界例心性が高い大学生は低い大学生よりも、不適応的な（未熟な）防衛機制を用いる」については、不適応的な防衛機制と「統制失敗」は対応しているため、支持されたといえる。また仮説3の、「境界例心性が低い大学生は高い大学生よりも、適応的な（成熟した）防衛機制を用いる」については、「自己統制」は適応的な防衛機制と対応していると考えられるため、仮説3も支持されたといえる。

Table 4
DSQ₄₂の因子分析結果（最尤法・プロマックス回転）

| | I | II | III |
|--|------|------|------|
| I 自己統制 | | | |
| 28 苦しい状況でも、そのおもしろい側面を見つめることができる。 | .64 | -.05 | .06 |
| 4 やる事には何でも、正当な理由を見つめることができる。 | .58 | .07 | -.02 |
| 6 自分の失敗を笑いに変えることができる。 | .47 | -.10 | -.06 |
| 32 困難な状況に出会うことがあった時には、その内容を予測し対策を立てる。 | .46 | .04 | .00 |
| 27 自分の活動の妨げになるような感情を私は抑え続けることができる。 | .45 | -.04 | .12 |
| 2 問題を処理する時間ができる時まで、その問題を考えないようにしておく。 | .44 | .00 | .07 |
| 18 物事がうまくいかない時にはもっともな理由がある。 | .38 | .11 | -.01 |
| II 統制失敗 | | | |
| 31 人生において自分が不当な扱いを受けていると確信している。 | -.16 | .50 | .16 |
| 29 好きでないことをしなければならない時には頭が痛くなる。 | -.11 | .50 | .02 |
| 22 傷つけられると、あからさまに攻撃的になる。 | .01 | .46 | .06 |
| 12 何かに悩まされている時には、しばしば衝動的に行動する。 | .14 | .45 | -.08 |
| 38 たとえどれだけ不平を言っても、けっして満足のいような回答を得られない。 | -.02 | .43 | -.05 |
| 13 物事がうまくいかない時には体の具合が悪くなる。 | -.14 | .42 | -.01 |
| 41 もし危機があったら、同じ問題を抱えている人を捜し出すだろう。 | .13 | .41 | -.03 |
| 35 落ち込んでいたり不安な時には、食べることで気分が良くなる。 | .23 | .38 | -.14 |
| III 万能感 | | | |
| 20 私は何も恐れない。 | .03 | -.06 | .78 |
| 17 問題なく人生をやり過ごせるような特別な才能もっている。 | .00 | -.11 | .66 |
| 23 知っている誰かが自分を守り神のようだといつも感じている。 | .10 | .24 | .47 |
| 因子間相関 | | | |
| | I | II | III |
| I | | -.10 | .40 |
| II | -.10 | | .01 |
| III | .40 | .01 | |

Table 5
防衛機制における境界例心性 × 性別の2要因分散分析の結果

| | 境界例心性 | | | 分散分析結果 | | |
|----------|------------|------------|------------|----------|-------------------|------|
| | 高群 | 中群 | 低群 | 境界例心性 | 性別 | 交互作用 |
| 自己統制 | | | | | | |
| 男性(n=40) | 4.50(.83) | 5.15(1.08) | 5.17(1.21) | 20.22*** | .57 | 1.20 |
| 女性(n=54) | 4.20(1.08) | 5.01(.86) | 5.32(1.02) | | | |
| 統制失敗 | | | | | | |
| 男性(n=38) | 5.19(.90) | 4.88(.77) | 4.15(1.29) | 32.03*** | 1.04 | .36 |
| 女性(n=46) | 5.45(1.02) | 4.99(.98) | 4.16(1.02) | | | |
| 万能感 | | | | | | |
| 男性(n=43) | 2.95(.22) | 3.11(.23) | 3.47(.22) | 4.60* | 3.37 [†] | .42 |
| 女性(n=51) | 2.43(.20) | 2.97(.21) | 3.17(.19) | | | |

注1) () はSD

注2) *** $p<.001$, * $p<.05$, [†] $p<.10$

先行研究では境界性パーソナリティ傾向と適応的な防衛機制との関連については一致した見解が得られていないが、本研究の結果では関連性が見出された。

なお、第3因子の「万能感」については境界例心性低群が高群よりも有意に高い傾向が得られた。この「万能感」はJohnson et al. (1992) に記述されていた「イメージの歪み」のうちの全能感と同じ特徴をもつと考えられ、「万能感」に関しては仮説4を支持しない結果となった。が、しかしこれだけでは詳細が不明なため、仮説4についてのさらなる検討を目的として、境界例心性と個々の防衛機制との関連を相関分析で検討することとした。その結果をTable 6に示した。境界例心性と $r=.50$ の比較的強い関連が見出されたのは「人に利用されることが多い」などの項目からなる「投影」, 「うぬぼれている人の鼻をへし折るのは私の誇りだ」などの項目からなる「価値下げ」, 「実生活でよりも空想上で満足を得ることが多い」などの項目からなる「自閉的空想」であった(すべて $p<.001$)。さらに、 $r=.30$ 以上のやや弱い関連が見出されたのは「受動攻撃」「行動化」「置き換え」「身体化」であった(「受動攻撃」 $r=.37$, 「行動化」 $r=.38$, 「置き換え」 $r=.32$, 「身体化」 $r=.37$, すべて $p<.001$)。また負の比較的強い関連が見出されたのは「ユーモア」であった($r=-.46$, $p<.001$)。「イメージの歪み」に該当する「価値下げ」は境界例心性が強いほど高まる防衛機制であるといえるが、その他の「イメージの歪み」に含まれる「理想化」や「分裂」は関連が見られなかった。仮説4の「境

界例心性が高い大学生は、「イメージの歪み」が見られるものの、低群は見られない」は、「イメージの歪み」のうち「価値下げ」のみで支持されたといえる。

考 察

本研究では、大学生の境界例心性の強さによってEgo-Resiliencyおよび自己評価された防衛機制の取り方が異なるかについて検討した。その結果、境界例心性が高い大学生はEgo-Resiliencyが低く、防衛機制の取り方でも情緒の統制につながる適応的な防衛機制をとりやすく、不適応的な防衛機制をとりやすかった。これらの結果から、境界例心性が強い大学生は自我がうまく機能していない部分があることがうかがえた。

Ego-Resiliencyについては、「対他的ER」および「対自的ER」ともに境界例心性が強い群がもっとも得点が低かったことから、境界例心性が強い大学生は自我の柔軟性が低いことが示された。「対自的ER」だけでなく「対他的ER」についても負の関連が見出されたことから、境界例心性が強い大学生が「対他的ER」についても低いということが示された。境界例心性に関する先行研究をまとめた江上(2012)が、境界例心性の強い大学生は家族へのネガティブな感情を有しており家族関係が不安定であることや、対人関係上で親密な関係を築きにくく困難が多いと述べているが、それらの知見と「対他的ER」の低さには関連があると推測される。境界例心

Table 6
境界例心性と防衛機制の相関係数

| | 受動 | | 価値 | | 自閉的 | | 置き | | エ七 | | 反動 | | 昇華 | | 予測 | | 抑制 | | | |
|-------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|-----------|--------|-----------|----------|---------|--------|------|------|----------|------|-----------|---------|-------|-------|
| | 投影 | 攻撃 | 行動化 | 隔離 | 下げ | 空想 | 否認 | 換え | 解離 | 分裂 | 合理化 | 身体化 | 打ち消し | 愛他主義 | 理想化 | 形成 | | 昇華 | | |
| 境界例心性 | .50*** | .37*** | .38*** | .27*** | .50*** | .50*** | -.09 n.s. | .32*** | -.05 n.s. | .08 n.s. | -.28*** | .37*** | .14* | .12* | .01 n.s. | .14* | -.09 n.s. | -.46*** | -.16* | -.20* |

注1) *** $p<.001$ * $p<.05$

性と Ego-Resiliency, 家族関係や友人関係などの間にはどのような関係性があるか、またどのような影響を及ぼしているかについては今後全体的な視点からの検討が必要である。

また防衛機制との関連については、境界例心性が強い大学生は境界例心性の中群や低群に比して不適応的な防衛機制を用いることが多く、適応的な防衛機制を用いることが少なかった。詳述すると、境界例心性が強い大学生は日常生活の中で生じる心理的苦痛や困難を自分で統制できず、他者の責任にしたり自分の世界に引きこもったり、身体化や行動化として転換してしまうなどの傾向がうかがえた。今回測定された防衛機制は自己評価されたものであるため、大学生自身が自分の特徴的なパターンだと意識しているということになる。しかし、それが不適応につながる防衛機制であるというところの認識までには至っていない可能性が考えられる。その認識を大学生自身に広く理解してもらい、より適応的な防衛機制をとれるように促すような心理教育的プログラムも有用になってくるのではないかと期待される。

また、境界例心性が強い大学生は弱い大学生よりも「万能感」が弱い傾向にあった。境界性パーソナリティ障害では全能感との関連が指摘されているが、境界例心性の高い大学生は「万能感」がむしろ低いという結果が得られた。境界性パーソナリティ障害の症状のひとつに境界例心性の強い大学生は空虚感を抱きやすく自己否定感も強いと考えられるため、ここの項目で示されたような「何も恐れない」「特別な才能をもっている」感覚は持てないのだろうと推測される。江上(2011)でも、境界例心性と「自己愛人格傾向」のうちの「優越感・有能感」では負の関連が見出されたため、今回もその結果を支持したといえる。なお、男子学生が女子学生よりもより「万能感」が強い傾向が見られたが、小西ら(2008)により自己愛人格傾向でも男子学生の方が高いという結果が得られていることから、このような「万能感」は男子学生の方が持ちやすいのかもしれない。

ところで、今回の分析では因子分析の段階で「イメージの歪み」として因子を抽出することができなかった。ただし、「価値下げ」については、境界例心性の強さと関連することも示された。Johnson et al. (1992)によると、境界例パーソナリティ傾向と「イメージの歪み」との関連は見られていなかったが、本研究でも「価値下げ」以外はその傾向は見られなかった。臨床群である境界性パーソナリティ障害にはその「イメージの歪み」との関連は多く指摘されているが、本研究の結果では、臨床群と異なる点が多く見られたといえる。ただし今回の分析は非臨床群のみの回答を分析したものであるため、臨床群との比較には慎重を期すべきである。

最後に、防衛機制について考えられる問題点や留意点

を三点挙げたい。一点目に、DSQ₄₂の尺度の因子構造についてである。本研究の因子分析の結果では、吉住・村瀬(2008)と同様に大学生を対象としており同じ三因子構造が確認されたものの、因子の内容に相違点があった。先述したが、Johnson et al. (1992)のように四分類を採用している場合も多い。したがって、DSQ₄₂の各下位因子の妥当性についてさらなる検討が必要だといえるだろう。また二点目に、本研究で上記のような分析結果が得られ考察を進めたが、心理療法を行う際には個々の事例の特有性についても考慮し、上記の結果を事例にあてはめることには慎重にならなければならないだろう。そして三点目に、今回の検討はあくまで自己評価によるものであるため、心理療法においてセラピストから見たクライアントの防衛機制とは異なる点があるということ想定しておかねばならないだろう。防衛機制は無意識の心的機制という主張に対して、Bond et al. (1983)は、経験からの自己認識や他者からの指摘で自身の防衛機制の傾向を知りえると反論したが、今回の調査では境界例心性が強い大学生が自己の意識の中でつかんでいる防衛機制の傾向を測定したといえる。しかし、自己評価による防衛機制は時として歪められる可能性があり、それは病態水準が重たいほど起こりうることを認知しておくべきである。今後も境界例心性に特徴的な防衛機制について検討していく場合は、質問紙だけでなくインタビューなどの面接法などの導入も必要となるだろう。1対1の心理療法の中で自己評価による防衛機制とセラピストから見るクライアントの防衛機制の一致や差異についても触れることが可能でもあり、差異については洞察を促したり、そこから起因する困難や苦痛についても話し合ったりすることも意義があるのではないと思われる。Johnson et al. (1992)によって、どのような防衛機制を用いるかで顕在化していない精神病のリスクを見分けることに寄与するということが主張されているが、防衛機制の用い方など個人の特徴を把握する機会がないため、どのように心理臨床の場で活用できるかは今後の課題といえるだろう。

まとめと今後の課題

境界例心性が高い大学生はEgo-Resiliencyが低く、不適応的な防衛機制をとっていたことから、境界例心性が強い大学生は自我がうまく機能していない部分があることがうかがえた。学生相談などの場で境界例心性が強い大学生に出会ったときには、今回得られた傾向をふまえて、大学生本人の特徴についても詳細に捉えていくことが、見立ての際の情報のひとつとなり、さらには有効な心理的援助につながっていくと思われる。本研究で検討されたEgo-Resiliencyについても、低いEgo-Resiliencyを少しでも高めていくような手立てについて考えられて

いくべきである。また、防衛機制については大学生を対象とした心理教育的プログラムの中で活用していくことが期待されるため、DSQ₄₂の因子の妥当性を確認し尺度の精緻化を進めていくことが必要である。

なお、本研究の対象は非臨床群の大学生であるため、境界例心性が強い大学生でも何らかの支えやよりどころをもっていたり、サポート資源を活用したりするなどの工夫を行っている可能性が考えられる。境界例心性が強い大学生がどのように大学生活の中で学業を遂行し、彼らなりの友人関係をもっているかについても焦点が当てられるべきであり、その点についても今後の課題の一つとして挙げたい。

謝 辞

本論文作成にあたりご指導いただきました、九州大学教授の福留留美先生に心より御礼申し上げます。

引用文献

- 安立奈歩 (1999). 青年期の境界例心性に関する研究. *心理臨床学研究*, **17**, 354-365.
- Arend, R., Gove, F. L., & Sroufe, L. A. (1979). Continuity of individual adaptation from infancy to kindergarden: A predictive study of Ego-Resiliency and curiosity in preschoolers. *Child Development*, **50**, 950-959.
- Asendorpf, J. B. & van Aken, M. A. G., (1991). Correlates of the temporal consistency of personality patterns in childhood. *Journal of personality*, **59**(4), 689-703.
- 馬場禮子 (2002). 防衛機制. 小此木啓吾・北山 修・牛島定信・狩野力八郎・衣笠隆幸・藤山直樹・松木邦裕・妙木浩之 (編). *精神分析事典*. 岩崎学術出版社, pp442-443.
- Block, J. H. & Block, J. (2006). Venturing a 30-year longitudinal study. *American Psychologist*, **61**, 315-327.
- Bond, M., Gardner, ST., Christian, J., & Sigal, JJ. (1983). Empirical-study of self-rated defense styles. *Archives of general psychiatry*. **40**(3), 333-338.
- Bond, M., Paris, J. & Zweig-Frank, H. (1994). Defense styles and borderline personality disorder. *Journal of Personality Disorders*, **8**(1), 28-31.
- Bond, M. (2004). Empirical studies of defense style: relationships with psychopathology and change. *Harvard Review psychiatry*, **12**(5), 263-278.
- Chuang, S. S., Lamb, M. E. & Hwang, C. P. (2006). Personality development from childhood to adolescence: A longitudinal study of ego-control and Ego-Resiliency in Sweden. *International journal of behavioral development*, **30**(4), 338-343.
- Devens, M. & Erikson, M. T. (1998). The relationship between defense styles and personality disorders. *Journal of personality disorders*, **12**(1), 86-93.
- 江上奈美子 (2011). 大学生における境界例心性がライフイベントおよび不快・快感情に及ぼす影響 パーソナリティ研究, **20**(1), 21-31.
- 江上奈美子 (2012). 非臨床群の境界例心性に関する研究の概観. *九州大学心理学研究*, **14**, 71-78.
- Eisenberg, N., Haugen, R., Spinrad, T. L., Hofter, C., Chassin, L., Zhou, Q., Kupfer, A., Smith, C. L., Valiente, C., Liew, J. (2010). Relations of temperament to maladjustment and Ego-Resiliency in at-risk children. *Social Development*, **19**(3), 577-600.
- Fonseca-Pedrero, E., Paino, M., Lemos-Giraldez, S., Sierra-Baigrie, S., Gonzalez, M. G., Bobes, J., & Munz, J. (2011). Borderline personality traits in nonclinical young adults. *Journal of Personality Disorders*, **25**(4), 542-556.
- 古川奈美子・北山 修 (2004). 大学生における境界例心性と親の養育態度・家族の雰囲気との関係性について. *九州大学心理学研究*, **5**, 207-218.
- 乾吉佑 (2009). 思春期・青年期の精神分析的アプローチ 出会いと心理臨床. 遠見書房.
- Johnson, J. G., Bornstein, R. F., & Krukoni, A. B. (1992). Defense styles as Predictors of Personality Disorder symptomatology. *Journal of Personality Disorders*, **6**(4), 408-416.
- Kernberg, O. F. (1980). *Internal world and external reality*. Lanham, Maryland: Jason Aronson Inc. 山口泰司 (監訳) 荻田牧夫・阿部文彦 (訳) (2002). *内的世界と外的現実 対象関係論の応用*. 文化書房博文社.
- Koenigsberg, H. W., Harvey, P. D., Mitropoulou, V., New, A. S., Goodman, M., Silverman, J., Serby, M., Schopick, F., Siever, L. J. (2001). Are the interpersonal and identity disturbances in the borderline personality disorder criteria linked to the traits of affective instability and impulsivity? *Journal of Personality Disorders*. **15**(4), 358-370.
- 小西瑞穂・山田尚登・佐藤 豪 (2008). 自己愛人格傾向についての素因-ストレスモデルによる検討- パーソナリティ研究, **17**(1), 29-38.
- 前田重治 (1985). *図説 臨床精神分析学*. 誠信書房.
- 皆川邦直 (1981). *精神分析的面接 その二 発達診断*. 小此木啓吾・岩崎徹也・橋本雅雄・皆川邦直 (編). *精神分析セミナー I 精神療法の基礎*. 岩崎学術出版社, 117-156.
- 長尾 博 (2002). 青年期の自我発達上の葛藤から不適応状態への心理過程. *発達心理学研究*, **13**(3),

- 295-306.
- 中西公一郎 (1998). The Defense Style Questionnaire 日本語版 (DSQ₄₂) —日本での防衛機制研究のために—. 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要, **47**, 27-33.
- 中尾達馬・加藤和生 (2005). CAQ 版 ER 尺度 (CAQ-Ego-Resiliency Scale) 作成の試み. パーソナリティ研究, **13**(2), 272-274.
- 西村優紀美 (2002). 危機的状況を呈した女子学生に対する学生相談の一例. 学生相談研究, **23**, 147-155.
- 布柴靖枝 (2012). 青年期女子の自傷行為の意味の理解と支援—行動化を繰り返しつつ, 自分らしさを模索していった女子学生の危機介入面接過程を通して—. 学生相談研究, **33**, 13-24.
- 小此木啓吾 (2002). 自我. 小此木啓吾・北山 修・牛島定信・狩野力八郎・衣笠隆幸・藤山直樹・松木邦裕・妙木浩之 (編). 精神分析事典. 岩崎学術出版社, pp154-156.
- 蓮花のぞみ (2008). 青年期と成人期における愛着スタイルと防衛スタイルの関連性. 生老病死の行動科学, **13**, 3-13.
- Sinha, B. K. & Watson, D. C. (1999). Predicting personality disorder traits with the defense style questionnaire in a normal sample. *Journal of personality disorders*, **13**(3), 281-286.
- Taylor, Z. E., Ejisenberg, N., Spinrad, T. L., Windaman, K. F. (2013). Longitudinal relations of intrusive parenting and effortful control to Ego-Resiliency during early childhood. *Child Development*, **84**(4), 1145-1151.
- Trull, T. J. (1995). Borderline personality disorder features in nonclinical young adults: 1. Identification and validation. *Psychological Assessment*, **7**(1), 33-41.
- Vecchione, M., Alessandri, G., Barbaranelli, C., & Gerbino, M. (2010). Stability and Change of Ego-Resiliency from late adolescence to young adulthood: a multiperspective study using the ER89-R Scale. *Journal of personality assessment*, **92**(3), 212-221.
- Watson, D. C. (2002). Predicting psychiatric symptomatology with the defense style questionnaire-40. *International journal of stress measurement*, **9**(4), 275-287.
- 吉住隆弘・村瀬聡美 (2008). 大学生の解離体験と防衛機制およびコーピングとの関連について. パーソナリティ研究, **16**(2), 229-237.